

はしがき

ミクロネシアの人々がフェルディナンド・マジェランを、その海岸で発見したのは、1520年のことである。その時以来島々を支配したが、マリアナ諸島において真の意味での植民地化を始めたのは1668年である。100年以内のうちに、スペインは、島々にキリスト教を持ち込み、先住民のチャモロの人口を7万からわずか1400まで激減させてしまった。

1899年に、ドイツはスペインからマリアナ諸島とカロリン諸島を買い取るに至る。それまでも、島々ではアメリカとドイツの伝道活動や貿易活動が増え、またアメリカが西太平洋でグアムとフィリピンを手に入れるなど、スペインの支配は縮小しつつあった。

ミクロネシアにおけるドイツの時代は、第一次世界大戦の初めに、日本によって突然さげざられることになった。武力で島々をもぎ取った日本は、トラックに軍本部を設置した。続いて、島々を六つの行政区（マーシャル、ポナペ、トラック、ヤップ、パラオ、マリアナ）〔に——筆者注〕分けている。そして1919年に、島々は国際連盟の委任統治領として日本の管轄下に置かれ、これにより日本は、この地域を「日本帝国の一部」として支配できるようになった。

日本による真珠湾攻撃のあと、アメリカは、ミクロネシアのなかを進軍していった。日本軍の基地のある島々は、第二次世界大戦の戦場のなかでも最も凄惨な戦いの場となった。アメリカと日本は何万人もの兵隊を失い、ミクロネシアの人々は、彼らにとってはどうでもいい、また何の益にもならない戦争に巻き込まれ——推定で5000人の命を失った。

あるミクロネシア人は、次のように述べている。「日本人は、ドイツ人やスペイン人と同じく、私たちを保護してやるといった……だが、日本の軍事基地は、戦争中、私たちを守りはしなかったのである。私たちの島々は、アメリカの飛行機に攻撃され、一つの島全体が戦場と化した……私たちの家族や親戚、年老いた人々などが死んでいった。日本とアメリカの戦争だったのに、私たちはそのために命を失ったのだ。」¹⁾

これは、1983年にミクロネシア支援委員会と太平洋問題資料センターが共同で編集した“From Trusteeship To……? Micronesia And Its Futures”から、核実験・戦略爆撃研究専門家の前田哲男が引用した記述であり、「過去の植民

地主義」に対するミクロネシア住民側の視点を示している。ここから読み取れるように太平洋に点在する島嶼地域は、16世紀以来約500年にもわたって、欧米諸国（日本を含む）の植民地とされてきた。その歴史を筆者なりに整理すれば、①マゼラン一行がグアムとその周辺の島々（後にマリアナ諸島と呼ばれる）、そしてフィリピンに到達した「太平洋の『発見』」の時代（16世紀）、②オランダのタスマン、イギリスのクック、フランスのブーゲンヴィルなどの「探検家」たちがこぞって「学術調査」を目的に島嶼内部にまで進出していった「太平洋の『探検』」の時代（17世紀末～18世紀）、③島嶼全域が欧米諸国の植民地と化した「太平洋の『分割』」の時代（19世紀～20世紀初め）、④太平洋戦争と核実験が島嶼住民の生命・生活環境・健康を奪ってきた「太平洋の『破壊』」の時代（20世紀中ごろ）という流れをへているといえよう。

現在の「太平洋」はどのような状況にあるのだろうか。1960年代以降から、ナウル、ソロモン諸島、マーシャル諸島共和国、パラオ共和国など、数多くの国々が「独立」を達成し、島嶼諸国による地域協力も進んできている。まさしく太平洋島嶼地域の住民たちが、自分の「歴史」を取り戻すことができたときこそ、「太平洋の『再建』」の時代と位置づけられることも可能なかもしれない。ただ、その可能性を見出すためには、我々が考えなければならない課題も数多くある。たとえば、米領グアムや仏領ポリネシアなどといった欧米諸国の植民地の存在、マーシャル諸島やムルロワ環礁における核実験被曝者に対する補償、米軍再編計画にともなうグアムへの基地機能移転問題などが挙げられる。

一方、日本という国家も、九州や本州などの数多くの島嶼地域で構成されている領域であり、数多くの米軍基地が展開されている。「アメリカ」という存在が基地をともなって日本社会にしみこんできたのが、先に整理した太平洋の歴史でいうところの「太平洋の『破壊』の時代」であった。この時代は一般的には「第二次世界大戦から米ソ冷戦への移行期」となるだろうが、あえて「破壊」という表現を用いて、20世紀中ごろの太平洋戦争と米ソ冷戦の激化にともなう核実験をひとくくりにつえようとしたのは、前田哲男の「冷戦＝核抑止戦略という東西間の関係を、その下部構造である南北関係＝核の植民地主義ぬきに説明するのは困難だ²⁾」という指摘に刺激されたからである。

20世紀中ごろの太平洋において、「植民地主義」という概念がいまだ古びることなく現実を照らし出しているとするれば、その現実とはどのようなものなのだろうか。本書は、このような問題意識から生み出されたものである。ここでは対象を限定して、20世紀中ごろに太平洋において大きな影響力をもった「アメリカ」を軸としつつ、植民地主義の再編を想定して生み出された「国際信託統治制度」の成立過程を具体的事例として、太平洋地域における現代史の一断面を描いていきたい。

- 1) 前田哲男「アメリカの太平洋核実験の歳月とその影響」佐藤幸男編『世界史のなかの太平洋』国際書院、1998年、234～235頁。
- 2) 同上、231頁。